鉱山発見伝説

この伝説のほかにも鉱山にまつわる話は多く、大部分は鉱山がどのようにして発見されたのか、その由来や起源を伝えるものである。尾去沢のもう一つの伝説では、やはり神の使いの姫が鉱山のありかを教えてくれる。あるとき尾去沢の近くに不思議な美しい女があらわれ、佐藤清助（せいすけ）という若者の家へ来て、この山の下を掘れ、あの山を掘れと教えた。そして世にも珍しい金というものが出てくるから、それを国主（くにぬし）に差し出したらどうかという。清助はそれよりも女の方に興味があったが、女は自分は仙台の金華山の神の使いである、汚れた心を改めよと言い残して消えた。女の言った所を掘ると金・銀・銅・鉛などが出てきた。

また尾去沢の一部である長坂（ながさか）に関し、やはり佐藤清吉

という者が夢の中で唐獅子の格好をした神の使いに教えられ、きれいなものを手に入れたが、それが何か分からない。すると金山彦（かなやまひこ）という老人がたずねて来て、それは金といって日本の国になかったものだ、ああいよいよ金の時代が来たと語り、水晶山の方へ飛び去った。清吉は金を天皇に差し出しほうびをもらった。

また和銅元年（七〇八）に初めて銅銭が作られたとき、銅を探すよう命ぜられた役人達が大森山のふもとまで来ると、空に獅子の姿と梵天（ぼんてん）を持った大勢の人の姿が現れた。獅子が梵天を投げたその場所を掘ってみると、銅が出てきた。これが赤沢の梵天舗（ぼんてんしき）の由来という。

白根（しらね）金山発見の伝説はかなり近年のもので、江戸初期の北十左衛門という歴史上の人物が主人公となっている。南部氏家臣の十左衛門が津軽との境を定めるため錦木の白根近辺に居をかまえた時、一人の老婆が訴え事を持ってたずねてきた。その手みやげの長いもを良く見ると、金色に光っている。老婆の願いをかなえてやると、村人の間にあの方は長いもが好きだ、長いもを持っていくと望みを聞いてもらえるかもしれないという噂が広がり、長いもを差し出す者があい次いだ。そのどれにも金の砂がついており、いも畑を調べてみると一帯は砂金の産地であった。その後の十左衛門について、大坂冬の陣・夏の陣の際に南部氏にそむき大量の金を持って大坂城に入り、南部光り武者と呼ばれたことが史書に見えている。